

第1室(2階21A会議室)

1部13:00-14:00

日影丈吉「ねずみ」論

黄如萍(台湾・国立高雄餐旅大学准教授)

日影丈吉「ねずみ」は『宝石』昭和34年9月に発表されたものである。作品について、「私」の視点で語られた「日本人の中におこった不思議な恋愛事件の顛末」<sup>9</sup>である。背景として「その頃(昭和十八年)私の部隊は台北市の対岸の新莊という町に、駐屯していた」とあるように、戦争中の台湾であることが分かる。当作品は従来研究史においてあまり論じられてはいない。その数少ない研究においては、江戸川乱歩が「表題の「ねずみ」とは何であろうか。シトシトと語り込んで行くこの作者独特の話術を味わってください」<sup>10</sup>と書評している。また、日影丈吉自身も「外地の軍隊生活では、兵隊と人妻の姦通の実例はいくつかあった。その中の中の兵長や、いっしょに悪いことをした奴は、モデルにして」<sup>11</sup>と指摘している。

作品の背景は台湾で、作中に描かれている台湾当時の「高砂ビール」「眠床」、或いは「西遊記」、繰り返されている演劇「双包案」など、作品にどのような機能を果たしているのか、またどのような台湾の実態が現れているのかも注目すべきであろう。

本論では、小説全体の仕組みを検討した上で、当時の作品背景に注目していきたい。論証方法として、まず、「私」の語った話を中心に論じ、「私」の語った話を追うことで、本作品を捉え直したい。続いて、当時の台湾的な要素も探り、日影丈吉文学における「ねずみ」の文学的位置を考える。

---

<sup>9</sup>江戸川乱歩『宝石』昭和34年9月

<sup>10</sup>参照注1

<sup>11</sup>日影丈吉「日影丈吉の周囲」『宝石』昭和38年10月

## 第1室 (2階 21A 会議室)

1部 13:00-14:00

### AI テキストマイニング技術による『コンビニ人間』読みの多様化

曾秋桂 (台湾・淡江大学教授)

藤田直哉によると、第二次世界大戦後に広がった「肉体文学」に対して、東日本大震災後、「生殖文学」が広がった<sup>12</sup>という。その「生殖文学」には、少子高齢化、原発事故、非正規雇用、戦争の予感、サブカルチャーの発展などのさまざまな理由により生殖への欲望が減っていることも描かれているそうである<sup>13</sup>。「生殖文学」の範疇に入っている数多くの作品<sup>14</sup>では、未来の生への責任が提唱されているなか、未来に向けて消滅を選択する、いわば「消滅主義」の典型例として村田沙耶香の『コンビニ人間』が挙げられている<sup>15</sup>。

東日本大震災後の文学を見る上で、一つの指標となる作品である村田沙耶香の『コンビニ人間』をエコフェミニズムの視点から試みた結果、人工知能AI的な生き方を選んだ主人公は学習能力を高めて、むしろ社会の実態を認識し、人間が人間であることを認識することがいかに困難か、自分とは何者でしかありえないかに相応しい生き方を得たという点に、新しい生き方が提示されていると言えよう。

本発表では、AIと協働する必要があると深く認識した上で、AIと人文社会とのコンタクトへの模索を目指して、AIテキストマイニング技術を駆使し、前述のエコフェミニズムの視点による村田沙耶香の『コンビニ人間』読みの多様化への支援を試みることにしたのである。

#### キーワード

AI テキストマイニング 『コンビニ人間』 読み 多様化 支援

---

<sup>12</sup> 藤田直哉(2017)「《生》よりも悪い運命」飯田一史・杉田俊介・藤井義允・藤田直哉代表編著『東日本大震災文学論』限界研 P457。さらにその特徴を「科学的な視線をしていること、ドライさが文体や構成のレベルまで反映されていること」を挙げている。

<sup>13</sup> 藤田直哉(2017)「《生》よりも悪い運命」飯田一史・杉田俊介・藤井義允・藤田直哉代表編著『東日本大震災文学論』限界研 P457

<sup>14</sup> 例えば、窪美澄『アカガミ』、村田沙耶香『殺人出産』、『消滅世界』、『コンビニ人間』、竹林美佳『地に満ちる』、川上未映子『三月の毛糸』、斎藤美奈子『妊娠小説』などである。

<sup>15</sup> 藤田直哉(2017)「《生》よりも悪い運命」飯田一史・杉田俊介・藤井義允・藤田直哉代表編著『東日本大震災文学論』限界研 P457

第1室（2階21A会議室）

2部 14:10-15:40

漱石と『莊子』—『坊っちゃん』を中心に—

吳雪虹（台湾・高雄市立空中大學助理教授）

発表辞退

## 第1室 (2階 21A 会議室)

2部 14:10-15:40

震災文学にみる日本文化の一端—岩手県出身作家の311への注目

范淑文 (台湾・台湾大学教授)

自然災害の多い日本では古きから災害に関する文学作品が残されている。無論地震に関する文学作品も少なくなく、時代によって、地震発生時の恐ろしさや地震に伴った被害、また地震を目にした人々の恐怖、さらに地震からの心的障害など創作の注目点は様々である。最近では、最も鮮明に人々の記憶に深く烙印され、多くの作家に語られたのが2011年に発生した東日本大震災であるのは言うまでもない。

震災後、さっそく川上弘美、古川日出夫、多和田葉子などの作家が地震やそれに伴った原発の被害について文学創作に臨み、東日本大地震をめぐる震災文学を次から次へと発表した。更に、四年後には岩手日報社の企画のもと、岩手県出身の作家12人による短編集『あの日から』が結実し2015年に発行された。前者の一般作家たちの創作に比べ、『あの日から』の作家らは震災地出身で、被害の傷が深かれ浅かれ、自分の身近で被害がまじかに起こったため、心的障害が大きかった作家たちばかりであるがゆえ、その注目点や語り口、思いが異なっている点に特徴がある。

小稿では、『あの日から』に収録されている沢村鐵の「もう一人の私へ」及び石野晶の「純愛」を考察の対象とし、作者の注目点やその語りの特徴より、時代や社会への文化の反映見出すことを主旨とする。

まず「もう一人の私へ」は、息子三津人への手紙という形で、地震後の町の様子、自分が生き残った経緯、そこから見えてきた家族との絆、古里に帰った心境、過去の自分への反省、生と死を見つめる自分の将来像が語られている。

一方「純愛」は、津波で亡くなった叔父聡史がなぜ津波に巻き込まれたのか、聡史の短い一生、誰にも知られなかった淡い恋、愛の表し方などが語り手によって綴られた物語である。

所収された他の短編と同様に、二つの作品は地震や津波の被害を通して、家族の絆という共通の主題以外に、両作品とも、偶然たる意外性が強調されている。前者の生き残った主人公、後者の死んでしまった主人公がそれである。触りを紹介すると「もう一人の私へ」では母親の急死で、主人公が葬儀の手配で病院に駆けつけたことで、翌日に起こった津波や自分の家が流された災害から逃れられた。言い換えれば、母親の死で主人公は生き残った。一方、「純愛」では、予知能力を持つ主人公聡史は、津波の被害に巻き込まれるはずがなかったのに、何故かわざわざ海岸に出向き妊婦を助け自分が犠牲になったというのである。このような類似した設定は偶然性のように捉えられないこともないが、そこには見えない力、逆らえない力、神が人々の生活の中に潜んでいる、日本社会にある宗教性が露呈していると見て取れる。そのような大都会では喪失した絆、地方文化のシンクロ的な人間味を思い起こさせてくれる災害文学と捉えたい。

第1室 (2階 21A 会議室)

2部 14:10-15:40

環境文学として読む村上春樹文学

葉菱 (台湾・淡江大学助理教授)

「環境文学はまさしく『自然の生態学的再生産と人間社会のコミュニケーション的生産の関連』を主題としている」(加藤：2007)と論じられているように、環境文学の主題は人間と自然の関係なのである。村上春樹は自分のデビュー作『風の歌を聴け』を「自分の中に存在する幾つかのイメージを、自分にぴったりくる、腑に落ちる言葉を使って、そのような言葉をうまく組み合わせて文章のかたちにし」たものと説明している。要するに、村上春樹は自分自身のために、自分自身を理解するために小説を書いているのである。しかし、周知のように「デタッチメントからコミットメントへ」と言われているように、90年代に入って、村上春樹文学の主題は「自己認識」という領域から「他人とのコミュニケーション」に変化してきた。さらに、阪神淡路大震災をテーマにした『神の子どもたちはみな踊る』において、人間と地震との繋がりが描かれている。本稿では、環境文学を視座にして村上春樹文学を考察する。また、比較文学の観点から「日本の環境文学の先駆的作家」(上岡：2015)と呼ばれる石牟礼道子の『苦海浄土』と村上春樹文学との関係性について究める。

## 第1室 (2階 21A 会議室)

3部 15:50-16:50

佐藤春夫の異文化体験、理解と表象  
—台湾、中国、バリ島の舞踊、音楽、絵画などについて—

邱若山 (台湾・静宜大学教授)

他国の異文化との接触において、相手の文化を理解するのに、文字、言葉を通して行われる場合は、相手の言語を知っていることや、翻訳、通訳、経験者の話などによって、始めてそれが達成できると思われる。そして、それを自分の一番熟練している言語（普通は母国語）で表象するのが、作家にしても一般の人にしても、共通だと思われる。但し、音楽、舞踊、絵画、建築などの芸術を愛でてそして表象するには、作家は自分の具有する芸術の素養、造詣、鑑賞力などを恃んで理解し自分の言語で表象するのがよくある。

大正、昭和期戦前、戦後に亘って活躍していた作家佐藤春夫は、1920年の7月初旬から10月にかけて、当時の殖民地台湾を廻り、またその間に2週間ほど対岸地方である中国の厦門、漳州へのはみだし旅行をした。その旅行記や創作はのちに『南方紀行』、『霧社』などに結集され、台湾、福建での異文化接触の体験、そしてその音楽、舞踊についての理解が作品に表象されている。それから、戦時下の1943年の11月より翌年の4月にかけて、ジャワに朝日新聞の報道員として半年ほど滞在していた。インドネシア、特にバリ島の舞踊、寺院、絵画、服装などの異文化に接触し、その体験が「ジャワのご馳走のはなし」「東印度の人々」「ジャカルタ日記抄」「スラバヤ」ことに「バリ島の旅」などの紀行文で記載され表象されている。

2020年は佐藤春夫台湾旅行百年記念として、台湾では、一連の展示会、音楽会、シンポジウムのイベントが国立台湾文学館によって企画、準備されている。この機に、小論で佐藤春夫における異文化体験とその表象を究明し、日本近代文学教育における異文化理解の課題を深く考える次第である。

キーワード：佐藤春夫、台湾、中国、バリ島、異文化表象

## 第1室 (2階 21A 会議室)

3部 15:50-16:50

中日対訳から見る台日言語文化の相違—黄春明「戦士、乾杯！」を例に—

頼錦雀 (台湾・東呉大学特聘教授)

翻訳と言えば、「起点言語 (source language)」を「目標言語 (target language)」に変換する作業だと言われようが、それはただの言語形式の変換作業だけではなく、異文化交流のプロセスでもあるように思われる。また、翻訳する際、起点言語のテキストと目標言語の間に「等価性」が成立するのが理想的であるが、そのようにならないことも考えられる。例えば、中国語の第二人称の「你」は普通、「あなた」と訳されるが、しかし、「你」と「あなた」とは本当に「等価性」が成立するかどうか、いろいろな視点から考えなければならないことである。そして、中国語の「深山」に当たる日本語は「深山」、「深い山」、「奥山」、「奥深い山」といろいろ考えられるが、それぞれどのように違うのか、訳語を取捨選択するとき、何が基準になるのか、難しい問題である。特に、台湾の中国語作品を日本語に訳すことは、言語形式と共に台湾文化を日本語によって伝播するようになるので、たとえ翻訳者が起点言語の中国語に可能な限り近似した日本語の訳文を目指すように頑張ったといっても、文化の相違によって日本語話者に理解しかねる場合も考えられる。例えば、台湾の「山胞」のことを「山岳民族」と訳しても、台湾事情に疎い読者ならば、それは台湾先住民のことを指しているということまでは分からないのではないだろうか。このように、中日対訳から台日言語文化の相違が考察される。

本発表では、黄春明 作「戦士、乾杯！」及び下村作次郎 訳「戦士、乾杯！」という中日対訳のテキストを例に、異化か同化か、増訳か減訳か、順訳か倒訳か、というような翻訳ストラテジーを明らかにし、また「文化詞」(文化語彙)はどのように訳されているのかを考察したあと、台日言語文化の相違について考えたいものである。

キーワード：中日対訳、黄春明、「戦士、乾杯！」、翻訳ストラテジー、言語文化

## 第2室(2階21B会議室)

1部 13:00-14:00

### 日英語通訳・翻訳における否定呼応現象

吉村理一(九州大学助教)

本研究では英語の否定呼応(Negative Concord)現象に焦点を当て、それらが通訳および翻訳教育において如何にして扱われ、教育され得るか、大学生が示す翻訳例を取り上げながら議論する。否定呼応とは、否定表現が文中に複数存在しているにも関わらず、二重否定とはならず単一の否定の意味しか表さない現象のことを指し示す。標準英語(Standard English)において原則的に否定呼応は確認されないが、北米のある特定の地域やコミュニティの中では日常的に多用される表現である。例を以下(1)に示す。

- (1) a. I don't never heard of that before. (Feagin 1979)
- b. I ain't never been drunk. (Feagin 1979)
- c. Nobody ain't doin' nothing' wrong. (Foreman 1999)
- d. Nothing don't come to a sleeper but a dream. (Green 2002)
- e. I don't never have no problems. (Green 2002)

例えば(1a)を標準英語の立場から解釈すると、文法的な問題がありつつも文中に否定語が2つ存在するので「私はそれを以前に聞かなかったことはない(聞いたことがある)」と理解され得る。ところが、この文はそのような意味を発している訳ではなく、実際は否定呼応が起きている例、すなわち“*I've never heard of that before.*”「私はそれを以前に聞いたことがない」として解釈がなされる。重要なことに、英語の否定呼応文は単なるマイナーな方言というわけではなく、テレビ、ラジオ、映画など日常生活の中で出現することが珍しくない。

- (2) a. We don't need no stinking badgers. (*The Treasure of the Sierra Madre*, 1948)
- b. Don't nobody go nowhere. (*Back to the Future*, 1985)
- c. What if I told you, age ain't nothing but a number? (*The Matrix*, 1999)

上記(2)の例文はメディアの中で出現した否定呼応文の一部である。日本の英語教育では初等教育、中等教育、高等教育のいずれの段階においても学習文法(規范文法)を軸に指導され、また学習者もそれらに基づく教材を学んでいる。つまり、特別な理由がなければ上記で示した英語の変異(方言)について学ぶ機会はないよう思われ、実際に語学を専攻する学生でも標準的な英文法の知識に頼って誤訳をしてしまう。

本研究は、英語の否定呼応文の特徴を、統語・意味、そして話者・地域性の観点からできる限りシンプルに説明する方法を論じ、通訳・翻訳教育において英語学および社会言語学の知識を教授する必要性を主張する。

<主要参考文献> **Feagin, C. (1979)** “Negation,” *Variation and Change in Alabama English: A Sociolinguistic Study of the White Community*, 209–242, Georgetown University Press, Washington. / **Green, L. (2002)** *African American English: A Linguistic Introduction*, Cambridge University Press, Cambridge.

## 第2室(2階21B会議室)

1部 13:00-14:00

明示的文法指導とフォーカス・オン・フォームに基づく文法指導の比較  
—日本人初級英語学習者における日本語の主題卓越型構造による転移の克服に向けて—

橋尾晋平(京都大学非常勤講師)

梅原・富永(2014)や橋尾(2019b)が指摘するように、日本語の主題卓越型構造は、日本語を母語とする日本人英語学習者が主語卓越型構造を基盤とする英語の文産出を行う際に障害となる場合があり、このような学習者の母語からの影響のことを転移と呼ぶ。

日本人英語学習者が主題卓越型構造からの転移を克服できるように、伊東他(2010)や白畑(2015)は、日英語の構造の違いについて、学習者が「気づき」を得るための明示的文法指導を提案している。橋尾(2019a)では、これらの研究を踏襲しつつ、日本語学の知見を援用しつつ、日本語の構文別に英語の文産出に関する指導を行うことを提案した。

本発表では、まず、発表者の勤務校の日本人初級英語学習者である大学生のクラスに対して、橋尾(2019a)の提案に基づく授業実践を4ヵ月間行い、授業実践を行ったクラスの学生の産出技能の伸長が見られたかどうかを分析する。その結果、授業実践を行ったクラスの学生の多くは、日英語の違いを理解し、英語で表現しにくいと想定される主題卓越型構造が強く反映されている文を英語で表現することができるようになったことを示す。

しかし、このような明示的文法指導は、それ自体では実践的なコミュニケーション能力の養成に繋がらないという批判もあり、近年は、コミュニケーションに重点を置きながらも、文法知識が習得できるようなアプローチとして、フォーカス・オン・フォーム(Focus on Form: FonF)が提案されており、高島(2011)は、FonFによって、日本語の転移が生じやすい文法項目を正しく習得するための活用の可能性を示唆している。本発表では、橋尾(2019a)の提案する明示的指導法と高島(2011)において取り扱われているFonFの指導法のどちらが転移の克服により効果的であるかを検討する。

橋尾晋平.(2019a).「大学生初級英語学習者の主語の習得に関する指導法の提案—主題標識「は」を含む助詞の意味に着目して—」同志社ことばの会記念論文集刊行会(編)『ことばとの対話—理論・記述・言語教育—』(pp. 303-312). 東京:英宝社.

橋尾晋平.(2019b).「日本人初級英語学習者における主題卓越構造の転移に関する一考察」『比較文化研究』136, 131-144.

伊東治己他.(2010).「高等学校における英語ライティング指導の実験的試み—主語選択に焦点を当てた和文英訳指導の有効性—」『鳴門教育大学授業実践研究—学部・大学院の授業改善をめざして—』9, 47-55.

白畑知彦.(2015).『英語指導における効果的な誤り訂正—第二言語習得の見地から—』東京:大修館書店.

高島英幸(編).(2011).『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』東京:大修館書店.

梅原大輔・富永英夫.(2014).「日本人英語学習者は主語をどう捉えているか:量的・質的研究」*JACET Kansai*, 16, 103-122.

## 第2室(2階21B会議室)

2部 14:10-15:40

### クリント・イーストウッドと米国異文化表象 ～コーパスと言語の視座から～

深津勇仁(慶応義塾大学 SFC 研究所上席所員)

本報告はクリント・イーストウッド監督作品の中でも特に、西部劇と戦争映画の映画スクリプトの言語に焦点を絞った研究である。映画スクリプトとは脚本であり、映画の撮影や配役等の演技指導を含めた監督とは別の人物が執筆している。本研究ではイーストウッド監督映画から西部劇と戦争映画の数作品のスクリプトを分析対象として既存の映画コーパスと比較し、語彙頻度差を計量的に測定する研究手法をとる。イーストウッド作品には異文化を表象するシーンが多く確認でき、それがスクリプトに基づくものなのかを定量的に分析する。分析の対象とする語に関しては、エドワード・サイードのオリエンタリズムの概念やポストコロニアル文学に特徴的に検出された語を基礎とする。具体的にはサイード(1998)で指摘された植民地文学のコンラッド『闇の奥』、キプリング『少年キム』、『ジャングル・ブック』、オースティン『マンスフィールド・パーク』、ディケンズ『大いなる遺産』の5作品において頻度上位の語を抜き出し、British National Corpus(BNC)と頻度差を比較する。検定にはコンピューター言語 R を使用し、フィッシャーの正確検定で有意水準を5%に設定して頻度差を検出する。植民地文学より検出されたポストコロニアルワードを現代映画スクリプトと比較するためにオンライン辞書のシソーラスを活用し語彙リストを作成する。そのリストをベースとして映画スクリプトから異文化表象に関連する重要語を抜き出して、オンラインの The Movie Corpus の語と頻度差を比較する。その際もフィッシャーの正確検定を使用し有意水準を5%に設定する。このようにしてスクリプトから検出された語を中心に定性的な分析を加え、考察を試みる。

分析の結果としては、有意差が確認できた語を分類すると 1,オリエンタリズムの固有名詞 2,白人開拓者や文明人(善) 3,原住民・野蛮の植民表現 4,戦争・侵略や植民表現 の4つの語に分類できた。この結果からイーストウッド監督の西部劇、戦争映画のベースとなっている映画スクリプトの言語にはオリエンタリズムの概念を基礎とした異文化を表現する語彙が含まれていることが確認できた。

#### 参考文献:

エドワード・サイード、『オリエンタリズム』、平凡社、1993年  
エドワード・サイード、『文化と帝国主義』、みすず書房、1998年  
石川慎一郎、『英語コーパスと言語教育』、大修館書店、2008年

## 第2室(2階21B会議室)

2部 14:10-15:40

異文化理解を視野に入れた内容重視の英語教育が学習者の発信力の向上にもたらす効果

山崎祐一(長崎県立大学教授)

子どもたちが外国語を学ぶ大きな目的のひとつは、異文化圏の人々と円滑にコミュニケーションを実現するための能力を向上させることである。特に英語は国際語として圧倒的に強い通用力を持つ言語であり、たとえコミュニケーションの相手が英語圏の人でなくても、共通媒体が英語になる可能性は非常に高いと言える。「言葉」はコミュニケーションにおいて重要な役割を果たすし、頭の中にあるイメージを相手に伝える重要な道具として機能する。世界の人々とやり取りをするために、言葉としての英語を習得することは、子どもたちにとってはとても有益である。しかし、子どもたちが「英語を使って何ができるようになるか」ということを考えたとき、もしそれが異文化圏の人々とのインタラクションを通して、適切かつ効果的にコミュニケーションを実現するための能力の基礎を培うことであるならば、言葉とともに学習の「内容」を理解し、その背後に見え隠れする社会文化的要素にも目を向けていく必要がある。子どもたちが外国の人々とお互いに意思疎通を図り、その独特のコンテキストの中で、自分とは違う世界や考え方を知り、それらを柔軟に認めながら、適切に目的を達成できるかどうかというところに、外国語学習の本当の楽しさがある。

本研究の主たる目的は、異文化理解を視野に入れた「内容重視」の英語教育の実践が、英語学習者のやり取り・発表を含めたスピーキング力を主としたコミュニケーション能力の向上にもたらす効果について検証することである。具体的には、語彙の暗記や文法重視で行われている従来の中学高校英語教育を内容重視の指導法に転換することによって、学習者たちの英語学習に対する意識がどのように変容するかを追究し、その教育の実践が、主体的・対話的で深い学びの実現や、学習者の英語による発信力にどのような影響を与えるかを検証する。2020年度より小学校で英語が教科化されることも踏まえ、新学習指導要領に準拠しながら、内容を重視した指導法が、学習者が英語を言葉として知るだけではなく、異文化に興味を持つことや、目的や場面、状況に応じて、適切かつ効果的に使えるコミュニケーション能力を身に付けることにつながるかどうかについて探究する。また、フィードバックとして得られる教育実践者の意見や、国内外での事例を参考に、現在の日本の英語教育のさらなる課題を明らかにし、その有効な解決法を検討する。本発表では、昨年度からの取組内容と実践の経過を報告する。

第2室 (2階 21B 会議室)

2部 14:10-15:40

イシグロ小説に描かれる「沈黙の暴力」

武富利亜 (岐阜薬科大学教授)

カズオ・イシグロは、『忘れられた巨人』を執筆するにあたり、社会や共同体が共有する記憶に興味を持ったという。実際、きっかけとなったのは、1990年代にユーゴスラビアで起きた内戦であった。平和に暮らしていた隣人が、些細なことをきっかけに、忘れていた憎悪の記憶が喚起され、殺し合いに発展する等、人間が非常時に見せる排他的な感情や行動。これは、現在、世界中に猛威を振るう、COVID-19の危機的状況と重ね合わせることができるのではないだろうか。コロナウイルスは、多くの人間の命を奪うだけでなく、世界中の経済や社会、ひいては、人間の精神や道徳観をも蝕んでいるといえるだろう。日本は、「外出自粛」を宣言し、地域ごとにそれを徹底させた。世界に比べると、感染者数や死者数が少なく、感染が確認された当初は、日本政府のオリンピック開催危機を懸念した、「感染者数隠し」等、世界のメディアから揶揄されたが、5月に入っても感染率もあがらないことから、「不可解な謎」と捉え、“**Could culture be the explanation?**”と、もともときれい好きな国民性とマスク装着や靴を玄関でぬぐ等の習慣があることから、日本文化を称賛する声さえあがるようになった。しかし、実際、日本は褒められたことばかりではない。政府の指示に従わず、「外出自粛」を守らない人々を一般市民が監視し、攻撃する、いわゆる「自粛警察」とよばれる人々が各地で出現した。病院従事者やその家族の子どもが幼稚園に登校しないよう要請する匿名の電話や手紙が寄せられたという。姿を見せずに人権を侵害する暴力的な言動や行動に出る人間が増加しているのである。本発表において、イシグロ小説に描かれる「沈黙の暴力」を読み解く。

第2室 (2階 21B 会議室)

3部 15:50-16:50

英語教育に映画字幕を活かす

藤枝善之 (同志社大学嘱託講師)

映画字幕は日本で特に発達した文化だと言われているが、英語教師にとって英語台詞の日本語字幕は、優れた授業教材を提供してくれる宝の山だと思われる。

この発表では、『羊たちの沈黙』(1990年)の“I have no plans to call on you.”を「電話する気はなかった」と訳した句動詞の問題を始め、『ゴースト ニューヨークの幻』(1990年)の“The love inside, you take it with you.”「僕の心には愛がいっぱい」に見える慣用表現の問題、『クイックシルバー』(1985年)の“Less to miss.”「そこがいい」に見る省略の問題、『ミセス・ダウト』(1993年)の“Two strippers?”「ほんとに？」に含まれる数量概念の問題、『タイタニック』(1997年)の“I love you.”「愛してる」や『ブラス』(1996年)の“Do you want to come up for coffee?”「コーヒー飲んでく？」に現れる語用論・会話の推意の問題など、様々な映画から採った英語の台詞とその字幕翻訳を材料として、英語の授業における字幕の使い方やその英語学的なポイントについて考察する。併せて、映画字幕を用いた英語学授業の一端を紹介したい。

第 2 室 (2 階 21B 会議室)

3 部 15:50-16:50

## The Impact of Using Memrise and “Memes” on Japanese EFL learners

前田葵 (京都大学大学院)

Abdur Kariko (2012) examined how humor and creativity in using internet memes for English education had a positive impact on students' achievements. “Memes” are part of the internet culture especially on social media, which combines forms of visual image, and humorous writing in order to convey political and social messages and mostly for entertainment purpose. While there are more researches on virtual learning platform using traditional methods such as flash cards, there seems to be a lack of investigating the “internet culture” that learners are often exposed to in their everyday lives.

This research is a case study on “Memrise”-- a vocabulary learning platform that uses algorithms for reactivating memory. Louis Walker (2016) did a thorough research on the impact of using Memrise on students learning Latin vocabulary. The benefits mentioned were: students felt more confident through meta-learning, students had a quick access anywhere and anytime, and students felt the sense of a learning community which triggered intrinsic motivation. Walker (2016), however, did not investigate one of the most special features on Memrise that other online platforms do not have, which is a feature on Memrise that allows students to learn vocabulary using memes.

My research questions are: (1) What are the Japanese Memrise user's perceptions on using Memrise as a vocabulary learning tool? (2) What are their perceptions on “memes”? (3) How did using memes and online platform help Japanese EFL learners? I conducted 3 interviews to Japanese users of Memrise, which they studied vocabulary on Memrise for a month. As a result, they felt that they were able to have a glimpse of humor in English culture that led to intrinsic motivation, and the accessibility allowed them to appreciate the habit of learning bit-by-bit and not cramming in one night.

### 第3室(2階21C会議室)

1部 13:00-14:00

#### 新たな「文化の仕掛け」の探究と創造 —伝統とビジネスのプロデュースをめぐって

関口英里(同志社女子大学教授)

本学が立地する京都は「千年の都」と呼ばれる一方で、どの時代にあっても常に新しい技術や発想を取り入れ、培ってきた伝統を再活性化させることで、長きに亘り当代文化をリードし続けてきた。発表者のゼミでは、その京都の文化的営みを学び、現代の消費文化イベントとしてプロデュースする活動を行っている。さらに時代のメディアを駆使した広報の重要性と技法を研究し、実践することを通じて伝統文化産業の振興に貢献する点に新たな独自性を持たせた。このプロジェクト型のアクティブラーニングは、地域貢献や文化の活性化、さらには学生のキャリア教育など様々な効果を有すると考えられる。

この教育的なプロジェクトがまず目指したのは、非日常の時空間と工芸品という物質文化をめぐる伝統の新たな融合とイベントを利用した活性化である。伝統工芸品は芸術作品或いはハレの舞台の調度として至高の価値を持つ一方で、一般消費者に普及しづらいという問題を有する。そこで現代人にとっても重要な非日常イベントながら親しみ深い婚礼に注目し、その中の演出として用いる工夫を考案した。また本企画の特徴は、時代や社会の比較文化的学びを基礎にしつつも、新たな販路や用途の拡大、認知度や消費の向上等のビジネス効果をも実現する創造的な学びの実践にある。また、時代のメディア特性を捉え、従来にない広報戦略を駆使したPR活動も重要な意味を持つ。そのため本企画では、工芸分野と和婚業界の老舗企業との三者連携を行い、実際の商品及びサービス販売に繋げる貢献を目指した。伝統と時流の間で変革が求められ続ける二つの文化的事象のコラボレーションをビジネスの場で実現することが狙いである。このユニークな取り組みにより、三者におけるそれぞれのベネフィットのみならず、地域の伝統に新たな可能性と新展開をもたらすきっかけ作りが可能になったのである。

企画運営の仕組みだけでなく、商品やサービスの価値として重要となる演出自体のコンテンツ開発に様々な仕掛けを導入したのも特筆すべき点である。文化的な意味作用を検討した上で、定番の婚礼儀式を代替しながらその象徴性や伝統的意義を活かす工夫を凝らし、工芸品の物質的価値と象徴的かつ記号的価値としての精神性に文化的な関連性を持たせた。そこに京都ならではのブランド価値を加えてイベント中に表現することで、伝統的な高級文化を身近な存在として活用する意図も込めた。

伝統工芸品の本質や魅力の理解と和婚企画の消費喚起のため、現代メディアを駆使した広報戦略も実施した。匠の技術紹介PVのネット配信、特設Webサイト作成、SNSでの情報拡散、デジタルカタログや広告デザイン等、マーケティングやPRの実践学習を通し、メディア学科生ならではの特性を活かした社会貢献を行った。今後も消費文化の仕掛けを読み解き創造する実践の成果を検証してゆきたいと考える。

### 第3室 (2階 21C 会議室)

1部 13:00-14:00

#### 同時代アイドル文化の文化論的分析

楊吟雨 (同志社大学大学院)

田口哲也 (同志社大学教授)

発表タイトルに副題を付けるとすると、「モダニズムとポスト・モダニズムのコアビタシオン」になる。本発表では近年注目度が下がったとはいえ、以前有効なモダニズムとポスト・モダニズムという2つの文化理論(=モデル)を再度検証する。理由はモダニズム期であれ、ポスト・モダニズム期であれ、すべての文化現象を単一のモデルで説明することに限界があるからだ。モダニズムとポスト・モダニズムは対立するのではなくコアビタシオン(=共棲)する。わざわざこのフランスの政治用語を借用したのは、思想的に対立していても、体制を維持するためには、たとえ協調できなくても、互いの機能を尊重するという政治的妥協のコンセプトが現実の表現文化にも適用できるのではないかと考えたからである。

研究対象はハイ・モダニズム期の英国の文人、T.S. エリオットと、AKB48系の「会いに行ける」アイドル・グループで、上海に拠点を置くSNH48である。

この組み合わせに奇妙な感覚を持つのは当然である。片方はノーベル文学賞も受賞した詩人、つまり典型的なハイ・カルチャーであるのに対して、他方はしばしば「オタク系」のサブカルとも呼ばれる同時代の大衆文化だからだ。これを説明する順番として、発表では最初にモダニズムを再定義し、次にポスト・モダニズムの概念を再確認する。

モダニズムは Malcolm Bradbury と James McFarlane による *Modernism: A Guide to European Literature 1890-1930*, Penguin 1976 以来、主に文学畑で議論が続いた。だが、例えば英文学で言うとジェイムス・ジョイスや D.H. ロレンスといった個々の作家研究の中で研究が蓄積されてきた。Fredric Jameson は、その著書 *Postmodernism or, the Cultural Logic of Late Capitalism*, Duke University Press, 1991 で、それらの個別の研究を総括し、モダニズムの作家やその作品が志向していたのは「ユートピア」であったと断じた。

「ユートピア」というのは、この場合、「理想社会」に等しい。例えばロレンスは近代西洋文明を否定して、その限界を超える理想社会をどのように建設するかを小説という装置を用いて思考実験を繰り返した。ジェイムソンによればこのようなモダニズムはテクノロジーの発達とそれに伴うマス(大衆)の発生、そして大量消費社会、情報化社会へと転じるなかで、その文化的機能を失い、時間の概念は現実認識において相対的に後退し、意識はもっぱら空間に引き付けられるようになったと主張する。このようなエポックでは新たな表現形態の創造は不可能に近いものになり、MTVに象徴される「トータル・フロー」と「サンプリング」が創作原理となっていく。

発表たちはモダニズム期のエリオットの初期作品にはポスト・モダニズム表現があり、逆に21世紀の上海のアイドル・グループの表現にはモダニズム的なコンセプトがあるという仮説を立てた。発表ではこの点を詳細に報告する予定である。

### 第3室(2階21C会議室)

2部 14:10-15:40

1968年におけるアメリカのベトナム戦争政策(米国大統領選挙とのかかわりの中で)

栢山剛(鳥羽商船高等専門学校准教授)

元来、ジョンソン政権のベトナム戦争の和平に関する姿勢は、南ベトナムで軍事的優位を確保できるようになるまで実質的な交渉には入らないという方針であった。一方、ニクソンは、ベトナム戦争を自国が受け入れられる条件で解決することを大きな狙いとしていた。つまり、このことは、軍備管理および経済協力の進展と引き換えにして東南アジアでの戦争からアメリカの「名誉ある」撤退を容易にするようにソ連に圧力をかけることであった。また、「チュー南ベトナム大統領の和平会議不参加」は、ニクソンが早くから工作し、ジョンソン大統領が、そのことを知っていながら、抗議もしないでいたことであった。ジョンソン大統領は、むしろ、副大統領であったハンフリー候補が、このことでニクソンを非難するのを抑えていた。

ニクソン大統領の当選後、ジョンソン大統領は、事実上、和平交渉から手を引いた。一方、サイゴン政府のチュー大統領のほうは、11月末に、「パリに代表を行かせて、そこで時間稼ぎさせたほうが得策」とし、代表を送った。その後、ニクソン大統領就任まで交渉は行われなかった。「交渉を進めないで、ベトナム戦争をニクソンにゆだねる」のが、ジョンソン大統領の最後のベトナム戦争政策となった。結局のところ、ジョンソン大統領は、テト攻勢後も政府内外のタカ派の勢力が強いので、「弱腰」を示して、もし南ベトナムが陥落するような事態になれば、マッカーシズム的なものが再発しかねないということを恐れて、タカ派の上に乗ってタカ派を装っていたのであった。

今回は、1968年のアメリカ大統領選挙でニクソンがわずかな勝利を挙げた背景に着目し、特に、なぜジョンソン大統領は、民主党ハト派が副大統領のフューバート・ハンフリーを当選させるために熱望していた「北爆全面停止」を大統領選挙の1週間前になってようやく行ったのかという視点を重視しながら分析していく。また、その後のニクソンの外交政策が、東南アジアだけでなく、中国や台湾にも大きく影響したことについても考察していく。

第3室 (2階 21C 会議室)

2部 14:10-15:40

澳門の異文化適応過程に関する探索的検討—南蛮貿易とキリスト教を中心に—

周聖來 (横浜外国語学校アーキヴォイス顧問)

発表辞退

第3室(2階21C会議室)

2部14:10-15:40

北朝鮮・「慰安婦」・歴史  
—長編推理小説『4つの氷』におけるジェンダー表象と  
繰り返される女への暴力の果てに—

李恵慶(大阪経済法科大学研究員)

『4つの氷』は2017年、北朝鮮の作家ジョン・イングアンによって発表された長編推理小説として、北朝鮮の文壇では初めて慰安婦関連テーマを取り上げた作品とされる。推理小説がマイナーな北朝鮮でこの作品がどのような評価を受けていたのかは定かではないが、出版翌年に増補版が刊行され、さらに『千里馬』という文芸誌に再掲の形で連載が始まっていたことなどからすると、北朝鮮国内ではかなりの人気を博していたようにみえる。そのためか、近年北朝鮮の文学が正式出版されつつある韓国でも具体的な出版計画が進められている。

この小説では、慰安婦問題と歴史認識をめぐる物語が、日本・韓国・タイを舞台に現在と過去(戦中)が複雑に交錯しながら壮大かつ重層的に紡がれている。そんな中、テキストにおいて特徴的なのが、2000年に東京で開かれた「日本軍性奴隷制を裁く2000年女性国際戦犯法廷」(以下「女性法廷」と略す)が物語の下敷きになっていることである。民間法廷とはいえ、日本の戦争責任を問い、かつてない判決を下したその法廷が世界に与えたインパクトは大きく、とりわけ日本では大きな社会問題として裁判沙汰にまで発展していたことは記憶に新しい。『4つの氷』は、その「女性法廷」での判決のその「後」を描いた作品として、タイで殺害された二人の日本人の死をめぐる謎解きを通じて日本の戦争責任をさらに厳しく問っている。そこからはこれまでほとんど知られてこなかった北朝鮮の慰安婦に対する眼差しや、慰安婦問題に関する認識の一端をうかがうことができる。

一見すると、この作品は単に反日プロパガンダのようにみえる。当然、テキストは日本に対する厳しい批判に貫かれており、その限りにおいてその見方は間違っていない。とはいえ、そこからすぐさま「親日/反日」という二項対立的な枠組みのなかに作品をはめ込むと、何とも短絡的で性急な判断というほかない。この作品は慰安婦、さらには日本と朝鮮半島の間の歴史=物語をめぐる実に様々な要素が複雑かつ重層的に絡み合い、錯綜しており、問題の本質が決して反日プロパガンダの一言で片づけられるほど単純なものではないからである。それを踏まえ、本発表では特に慰安婦のジェンダー表象と繰り返される女性への暴力に光を当て、慰安婦がどのように眼差され描かれているのか、そしてそれが慰安婦問題や歴史認識といかに結び付けられているのか、日本と韓国の慰安婦関連文化生産物を視野に入れて浮き彫りにしながら、この作品の慰安婦問題における表象の可能性と限界に迫ってみる。

### 第3室(2階21C会議室)

3部 15:50-16:50

明治5年「学制」における「罫画」の設定—科目名の淵源を探る—

向野康江(茨城大学教授/東北大学大学院)

日本の近代教育の嚆矢をなす「学制」(明治5.8.2〔1872.9.4〕)は、その科目中に「罫画」という教科目を設けている。「罫画」については、旧来美術・図画教育史において論じられてきた。しかし「学制」において示される「罫画」「画学」には、美術・図画教育の枠組みでは論じきれない過渡的な性格、多様な意図を内在している。本稿では、「罫画」ならびに関連科目について、科目名にこだわりつつ淵源を探ろうとするものである。

まず「学制」に見る「罫画」の位置付けと課題とを確認し、その上で「罫画」設定に先立つ状況、すなわち、「学制」に先行する「文部省学制原案」、さらに参照されたであろうヨーロッパの学制翻訳書に溯って検討を加えていくこととする。

以下のような構成を考えている。

第1節、「学制」における科目名の揺らぎ

第2節、岩倉使節団留守組と「文部省学制原案」における関連科目名

1、岩倉使節団と「学制」編成の経緯

2、「文部省学制原案」における「形(型)を造る」教育関連科目

第3節、幕末明治初期の造形用語の動向—「図」と「画」、「図画」「罫画」の位相—

1、『和蘭学制』における関連用語

2、『仏国学制』における関連用語

第3室(2階21C会議室)

3部 15:50-16:50

「一般教育」「道德教育」の根源としての「阿彌陀仏」について

入江良英(精華女子短期大学教授)

本来、「保育・教育」には二つの方向性があると考えられる。その二つとは、①個人から才能・能力を引き出すこと(個性化)であり、②社会の中に適応していくこと(社会化)である。この二つが合致し、はじめて、人は人に成長していくのであるが、このコンビネーションが何らかの原因でうまくいっていないというのが、現在の人間的状況である、といえよう。個性化=自力、社会化=他力、と極めて単純に図式的に考えれば、親鸞を主とする浄土教というものが唱える他力、そして絶対他者としての「阿彌陀仏」に導かれる他力というものが「単なる社会化という同調圧力」とは似て非なるもの、それは阿彌陀仏という「他力(絶対他者)」を見出しつつ、それと一体化するわけで、極端に言えば、他力であって自力ともいえる、のである。しかし、それは「祖師にあっては祖師を殺し、仏に会っては仏を殺す」という「禅」の絶対自力とは悟りの道筋が違う、対照的な「自己発見」でもある。

もちろん浄土教系のご本尊は、「阿彌陀仏」である。「さて、阿彌陀仏とは誰なのだろう？」親鸞の著作『教行信証』によると、「仏となられてからすでに十劫(一劫は一つの宇宙が誕生し滅亡するまでの期間)を経ておられる。その寿命は限りなく、はかり知ることができない。さとり身の光から放たれる光はすべての世界に満ち満ちて、迷いの闇の衆生を照らす」とある。またその光は十二種類あるといわれる。そして阿彌陀仏は、大日如来、釈迦牟尼の師匠でもある、のである。

さて、「禅者」として世界的に有名な鈴木大拙は、実は、「浄土真宗」の研究者としても高名であった。大拙は以下のように述べている。「大乘仏教が極東で成し遂げたあらゆる発展の中で最も注目すべきは、浄土真宗の教えである。」この教えは一見したところ、「自己信頼と智慧のさとり、仏陀本来の教えと思われているものとまったく対照的である」「浄土教・真宗では、アミダはわれわれの内なる自己に入り、この自己と一体になる。言い換えれば、この自己は、自らをアミダの中に見出すとき、われわれは浄土にいる」。以上、見事に「浄土教・真宗の精髓を描写している。

浄土教が7世紀前半、飛鳥・奈良時代に伝えられてから、平安・鎌倉・室町を経て現在まで、「阿彌陀仏」は、様々に出現してきた。その中でも、「法然」「親鸞」「一遍」の名は、誰もが挙げることであろう。「仏法は一人ひとりのしのぎなり！」という蓮如の言葉が正しいとするなら、まさに一人ひとりに「阿彌陀仏」が語りかけたということであり、その受け取り方も一人ひとり違うという事である。親鸞は、『歎異抄』の中で、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」と言っている。これは親鸞における阿彌陀の出現である。では、「未来における阿彌陀の出現」とは、どのようなものになるのだろうか。未来の人々が、どのように阿彌陀と出会うか、そして、新たな心を共にした共同体が行動を起こす「一揆」が、どのように生じるのか、が問われることであろう。

## 第 4 室 (2 階国際会議室)

1 部 13:00-14:00

「へと+動詞」構文についての考察—変化動詞を中心として—

陳志文 (台湾・国立高雄大学教授)

「上級日本語」の授業において、教科書に下記のような文がしばしば出てくることがある。

例(1) そこには、四十億年という気の遠くなるような時間の流れの中で、原始の海に誕生した生物が陸の生活に適応し、人類へと進化してきた歴史がそっくりそのまま凝縮されているとも言う。

ここに出てきた「へと」の使い方は学生たちにとってどうも理解しがたい文型の一つのようである。なぜその文型が学生には習得しにくいのか、我々授業者にとってはおそらくわからないことでもないと考えられるだろう。というのは、日本語教育の教科書では、初級日本語から中級日本語までこの文型に関して一度も言及されていないからである。もちろん、例(2)例のように格助詞「へ」にかかわる文型なら、ずいぶん初級の段階ですでに導入されている。

例(2) わたしは家族と日本へ来ました。『みんなの日本語』(第5課)

しかしながら、例(1)を例(3)に変換しても文法的には問題はないのに対し、例(2)を例(4)に変換すると、現代日本語としては容認度が低くなる文になるだろう。

例(3) そこには、四十億年という気の遠くなるような時間の流れの中で、原始の海に誕生した生物が陸の生活に適応し、人類へ進化してきた歴史がそっくりそのまま凝縮されているとも言う。

例(4) わたしは家族と日本へと来ました。(?)

以上の操作からわかるように、「へと+動詞」の構文を「へ+動詞」に変換した場合ニュアンスは若干異なるものの、たいてい文としては成り立っており、意味的にもあまり変わらない。これに対し、「へ+動詞」の構文では、「へと+動詞」に変換すると、しばしば非文法的か、容認度が低い文になることがわかる。発表者は陳(2019)において「へと+動詞」構文に関して「移動動詞」を中心に考察したが、さらに「変化動詞」も考察対象に入れる必要があると思われるため、本発表では、こうした興味深い問題に触れ、「へと+変化動詞」構文の特徴を明らかにすることにする。

### 【参考文献】

陳 志文 (2019) 「東アジア日本研究者協議会第4回国際学術大会」台湾大学

## 第 4 室 (2 階国際会議室)

1 部 13:00-14:00

### 国語に関する世論調査の日韓比較

梶原雄 (同志社大学嘱託講師)

日本の「国語に関する世論調査」は、国語に関する意識や理解の現状について調査し、国民の国語に関する興味関心を喚起するために、平成 7 年度 (1995 年) から毎年実施されている。他方、韓国においても、国立国語院が 2005 年に初めて「国民の言語意識調査」を実施しており、5 年毎に行われた調査は 2015 年で 3 回目となった。本調査は日本の「国語に関する世論調査」とは違い、設問は過去の調査で使われたものを踏襲しており国語に関して幅広い観点から構成されている。

このように、日本の「国語に関する世論調査」と韓国の「国民の言語意識調査」は日韓両国において国語に関する大規模な調査の一つであり、各言語の特徴やそれらを取り巻く環境などを考慮して独自に作成されたものであるが、両調査には類似する設問も見受けられる。とりわけ、敬語については日韓両言語において発達していると言われており、複雑な体系はもとより使い方を誤れば対人関係に影響を及ぼすため、日韓両国においては社会的に関心が高い項目の一つであると言える。

そこで本研究では、日本の「国語に関する世論調査」と韓国の「国民の言語意識調査」の結果をもとに、日本と韓国における敬語意識や敬語の用法を比較し、日韓両国において敬語に対する社会的な認識がどのように変化しているかを明らかにする。



## 第 4 室 (2 階国際会議室)

2 部 14:10-15:40

### AI テキストマイニング技術による言語ジャンルのテキスト的特徴

落合由治 (台湾・淡江大学教授)

今まで、テキストマイニングは、言語ジャンルを顧慮せずに、共起関係による単語の分布特徴の数量的把握を中心に使われてきた。AI による言語のビッグデータ解析も基本的には単語の量的分布特徴の把握である。しかし、言語には語、文、文章という質の異なる単位が存在し、実際に社会で使われている言語単位は、すべて文章である。言語の質的特徴が把握されない限り、いくら AI の自然言語処理技術が発展しても、寛容な部分で信頼性や実用性を高めることは難しい。逆に言えば、人間が質的に言語を理解しているときの特徴把握が具体的に認識できれば、それは AI の自然言語処理にも応用可能であり、また言語研究においても新しい分野を開拓する契機になる。

本発表では、文章構成の違いでテキストマイニングの結果の意味が異なる点に注目し、単語の分布特徴と質的な意味理解である文章ジャンルの相違に応じた内容理解との関係を説明していきたい。今回は、文章ジャンルの中から新聞の論説記事、事件記事、解説記事という 3 種類の文章構成の異なる文章を選び、テキストマイニングによる量的分析結果と質的分析で読んだ結果とを比べ、相互に比較対照して、文章ジャンルに相違に応じてテキストマイニングが捉えている質的な意味の位相を明らかにしてみたい。

キーワード

テキストマイニング 文章ジャンル 新聞 多様化 量的分析 質的分析

## 第 4 室 (2 階国際会議室)

2 部 14:10-15:40

### 諺文型分類と日本語教育への応用

奥村訓代 (同志社女子大学非常勤講師)

私たちの日常生活の中には、色々と有意義な表現があります。それらは格言やことわざ、名言や教訓といわれていることが多いようです。

今発表では、去る 2020 年 2 月 22 日 (土) に同志社大学で行った日本ことわざ学会西日本大会で紹介した「ことわざの 15 文型分類」を基に実際の日本語教育での運用について報告したいと思います。このデータや報告が、外国人の日常生活を豊かにする同時に、日本人との協働生活において双方の異文化理解や多文化共生に役立つことを期待しています。

ことわざ理解の例 (日本語教育への応用)

例 1 犬も歩けば棒に当たる

文型: A も B すれば C になる

例 2 青菜に塩、鬼に金棒

文型: A に B すれば C になる

説明 「青菜に塩」は、一見「A に B」或いは「NにN」などとしがちであるが、実際のことわざの意味は、「青菜に塩を振る (かける)」行為とその結果、或いは具体的に「青菜に塩を振りかけるとしなだれる」を意味している。

同様に、「鬼に金棒」も「鬼に金棒を持たせると余計にその強さを増す」という意味となり、特に外国人を相手にする日本語教育では、全文理解に配慮した文型「A に B すれば C になる」を提示する必要がある。

など、日本語教育の実践を視野に入れ「ことわざ」を 15 文型の分類している。

#### 第4室(2階国際会議室)

3部 15:50-16:50

#### 南仏文芸復興と台湾文学—在台日本語文壇の郷土主義—

石川隆男 (台湾・台湾大学非常勤講師)

1939年12月台湾では文芸界が一元化され『文芸台湾』が誕生した。本論はこの流れを「郷土主義」で捉え直し、当時台湾社会のギルド的文芸協会が実は南進政策を背景に文壇幹部の南仏文学への嗜好と野心を孕んでいたことを考察の目的とする。

日本での「郷土主義」の隆盛は1930年代であるが、1870年代のドイツの工業化第二波の人口大移動が嚆矢となる。西部の工業化で東部の過疎化が進み郷土の文化消失を危惧してドイツ郷土保護主義運動が起こり郷土育成主義へと発展した。これは日本の急激な近代化の明治期も同況下にあり、「郷土主義」は容易に受容された。結果ドイツ「郷土文学」(Heimatkunst)が明治末期より紹介され、文芸・思想・教育に影響を与え日本の「郷土主義」の基盤となった。20年代の世界恐慌による農村部救済の郷土教育運動、30年頃の農本主義、転向による「郷土」回帰、35年の日本浪漫派など、明治からの近代化に反対し日本の郷土への回帰を訴える潮流には、近代化が鮮明な地方問題を抱えていたからだった。30年代外地台湾でも台湾人を主体とした第二次郷土文学運動が盛んとなり、台湾語による文学活動や郷土愛が叫ばれた。一方統治も40年になり、在台日本人二世三世が文学活動を担うようになった。また、満州事変や日中戦争のため台湾総督府の統制が厳しさを増し、1937年の漢文欄禁止令により台湾人の郷土文学運動は活動の場を失い、台湾文芸界は原則日本語だけとなった。この頃登場するのが詩人作家西川満と比較文学者島田謹二である。彼らは、内地に定着したドイツ郷土主義を尻目に外地台湾に南仏型郷土主義を持ち込んで文壇を立ち上げたのである。無論目指すは、南仏プロヴァンス文学であった。西川満は1933年早稲田大学を卒業する際、恩師吉江喬松より台湾において南方郷土文学、地方文学の構築を促された。彼は詩人ミレイトスを研究し、師の夢の実現に奮闘することになる。吉江喬松は大正期にフランス留学し日本にプロヴァンス文学を紹介した人物である。フランスの「郷土主義」(régionalisme)の到来だった。また一方の島田謹二は東北帝大出身の英文学者で、当時台北帝大の教授であった。彼は、当時フランスで脚光を浴びていた比較文学の思想と、パリを中心とするフランス語文学と南仏プロヴァンス地方の現地語文学という「郷土主義」に注目、さらにはフランス植民地へも波及したフランス式「郷土主義」による外地文学(植民地文学)を引き合いに、日本の南方外地台湾に台湾版を立ち上げようと夢を見た。結果二人の功績で、台湾文学界は日本の浪漫主義を含むドイツ「郷土文学」に対抗する形で文壇を立ち上げたのだった。

しかし、台湾人グループは離脱し別途文壇を立ち上げ、同じ二世の新垣宏一は台湾郷土愛を中心に「郷土主義」(Taiwanism)を訴えた。そこで、新垣宏一の作品を視点に台湾の郷土主義文学の実態に迫りたい。

#### 第4室(2階国際会議室)

3部 15:50-16:50

### 韓国における性欲学の輸入と性的アイデンティティの形成 —日本の性科学受容と比較して—

朴秀浄 (大阪大学招へい研究員・韓国聖潔大学校非常勤講師)

性科学(Sexology)は、医学と科学の力を借りて「正しいセクシュアリティ」と「望ましいジェンダーロール」を創り出し、その規範から「逸脱」した存在を社会的に排除する学問である。市民社会の道徳的な秩序と価値観の成立を試みた19世紀の欧州にて勃興したこの学問は、近代化時期の日本に受容され、日本は、明治末期から昭和初期にかけて西洋発の「正常／異常」な性をめぐる言説と規範を盛んに再生産した。そして、性科学の知識とそれに即した性規範は、日本を媒介に韓国・植民統治時代の朝鮮へ行き届いた。

日本ではSexologyの翻訳語として性科学のみならず、性欲学という独自の表現が使われており、この言葉は韓国で刊行された雑誌『東光』の寄稿文(金允経「性教育の主唱」『東光』第11号、1927年3月)などにも見られる。性科学書が韓国語に翻訳されたことはなく、当時の知識人・文人たちは主に和訳書や日本の研究者が著した性欲学の文献を通じて性科学の知見を渉猟したと考えられる。近年韓国では、20～30年代の雑誌と新聞に見られるエロ・グロ・ナンセンスの記事が、同時代の日本に流布していた「変態性欲言説」、すなわち性科学の言説に関係していることが指摘された(Park-Cha Minjung, 2018)。ただし、日本で受容された性科学の知とその規範が、さらに韓国へ広がった経緯やその展開は明確にされていない。

そこで、本研究が注目するのは、性科学・性欲学が日本を経由して韓国に定着する過程において、日本と似通った性に関する概念を築き上げただけでなく、日本が積極的に受容した性科学の一側面は、韓国へ伝わる際に払い落されたという相違である。というのは、性科学がその特権的な知識の支えを得ているのは、「逸脱者」が自ら行う「性の告白」であり、このような「告白」は、性科学が日本に受容された時に「逸脱者」という「他者」を形成するための欠かせない要素として受け入れられたからである。しかし韓国の場合、性科学・性欲学の知識を援用して「性的他者」を規定する際に、「告白」はさほど重要な位置を占めない特徴を見せる。

本研究では、欧米から日本へ輸入された性科学の知見が韓国へ拡大していく経緯を追いつつ、日韓における性科学の受容を比較・対照する。とりわけ、「告白」を通じて成立する性的アイデンティティを中心に、性科学が日本と韓国においてそれぞれ展開していく様相と、その相違を生み出した原因をまで解明する。

# 比較文化論 No. 38

発行：

2020年9月5日

日本比較文化学会

本部事務局：

803-0835 北九州市小倉北区井堀 1-3-5 西南女学院大学

日本比較文化学会第42回全国大会・2020年度国際学術大会準備実行委員会事務局

803-0835 北九州市小倉北区井堀 1-3-5 西南女学院大学

八尋春海研究室内

Email: yahiro@seinan-jo.ac.jp

印刷：

モリプリンティング株式会社

北九州市八幡西区穴生 3-11-5